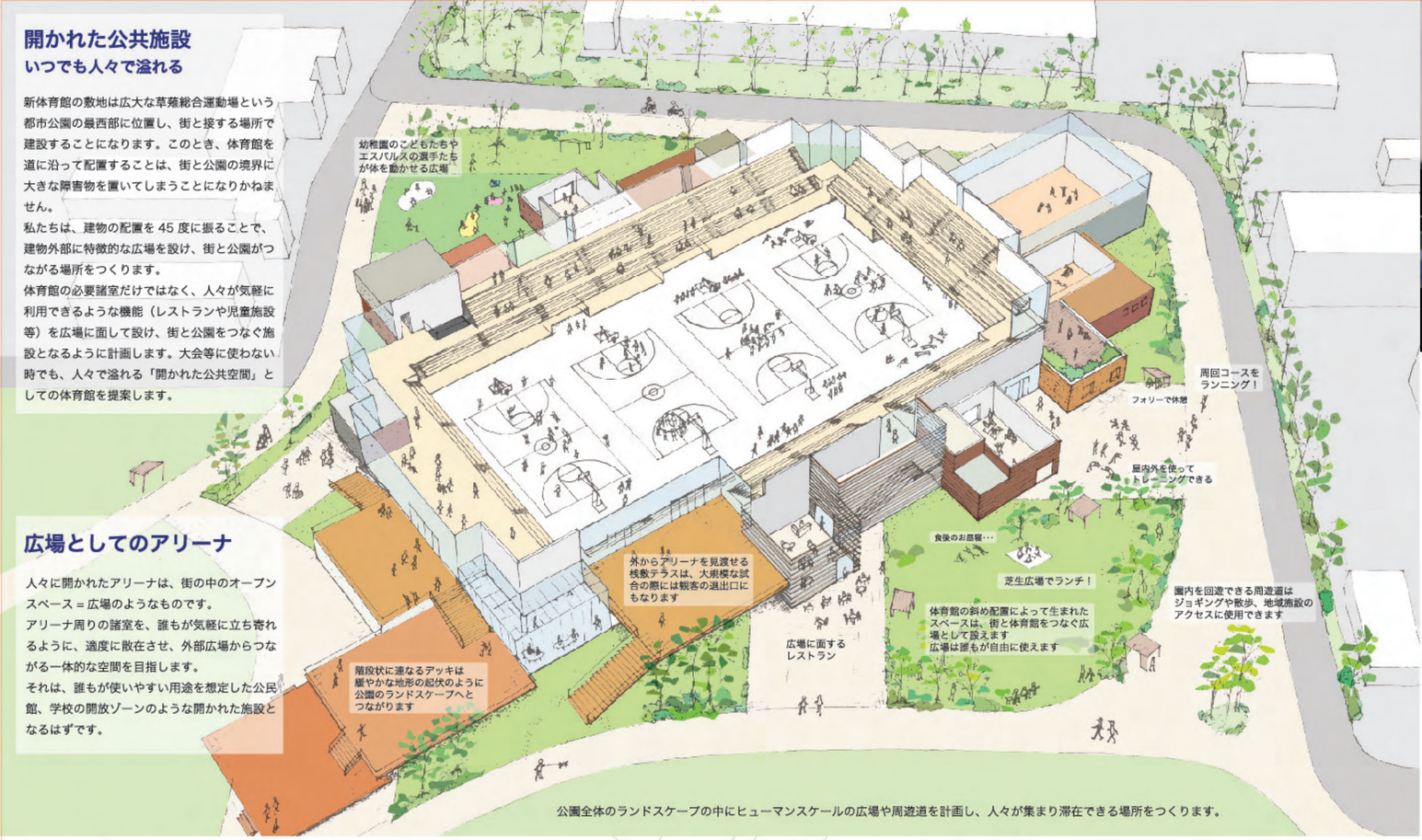
## 開かれた公共施設
### いつでも人々で溢れる

新体育館の敷地は広大な草薙総合運動場という都市公園の最西部に位置し、街と接する場所で建設することになります。このとき、体育館を道に沿って配置することは、街と公園の境界に大きな障害物を置いてしまうことになりかねません。
私たちは、建物の配置を 45 度に振ることで、建物外部に特徴的な広場を設け、街と公園がつながる場所をつくります。
体育館の必要諸室だけではなく、人々が気軽に利用できるような機能（レストランや児童施設等）を広場に面して設け、街と公園をつなぐ施設となるように計画します。大会等に使わない時でも、人々で溢れる「開かれた公共空間」としての体育館を提案します。




## 広場としてのアリーナ

人々に開かれたアリーナは、街の中のオープンスペース＝広場のようなものです。
アリーナ周りの諸室を、誰もが気軽に立ち寄れるように、適度に散在させ、外部広場からつながる一体的な空間を目指します。
それは、誰もが使いやすい用途を想定した公民館、学校の開放ゾーンのような開かれた施設となるはずです。

公園全体のランドスケープの中にヒューマンスケールの広場や周遊道を計画し、人々が集まり滞在できる場所をつくります。

ランドスケープとつなぐ～ソリッドからスケルトンへ

## 地域を考える

### パーゴラのようなフラット屋根

敷地の地下水位は高く、敷地周辺は中低層の建物が多く立地しています。メインアリーナの屋根をフラットにすることで、地下をつくらずに建物の高さを低く抑えることができ、圧迫感のないスカイラインを実現できます。
このフラット屋根は屋外のような清々しさを持つパーゴラのような覆いであり、シェル屋根などの強い形態によらない「新しい建築の象徴性」を表現しています。

### ボックスによって街と公園の景観をつなげる

ボックスは、木の外装からスケルトンのガラスにグラデーション変化していき、公園の風景と人々をこの建物に引き込みます。

ボックスの積み重なった様子は、小さな建物が寄り集まった周辺のまちのスケールにフィットします。

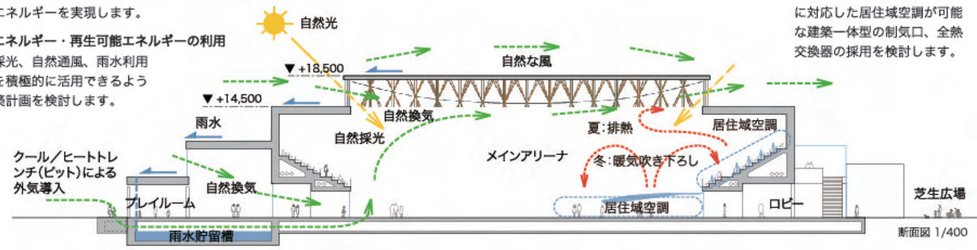
タウンスケープとつなぐ～小さなスケールから大きなスケールへ

## 環境に配慮した設備計画

**大会時／通常利用に対応可能なシステム**
比較的負荷の低い通常利用に深夜電力利用の蓄熱システム、大会時などに通常負荷を上回る対応としてピークカット用電力・ガス併用の空調熱源システムを採用し、差のある負荷双方に適合しながら省エネルギーを実現します。

**自然エネルギー・再生可能エネルギーの利用**
自然採光、自然通風、雨水利用などを積極的に活用できるような建築計画を検討します。

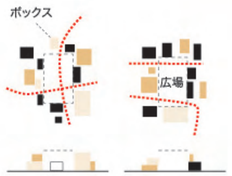
**空間・系統別に運転可能な空調システム**
アリーナ、客席などそれぞれに対応した居住域空調が可能な建築一体型の制気口、全熱交換器の採用を検討します。



断面図 1/400

## ボックスを自在に配置する

アリーナ周りの諸室を、サイコロのようなボックスと捉え、アリーナ＝広場を中心として敷地に散りばめます。ボックスを積み、立体的に配置することで、体育館がかたちづくられます。この設計手法によって、ワークショップや検討委員会を通じて、この場所と機能に合った体育館へとブラッシュアップしていくことが可能です。

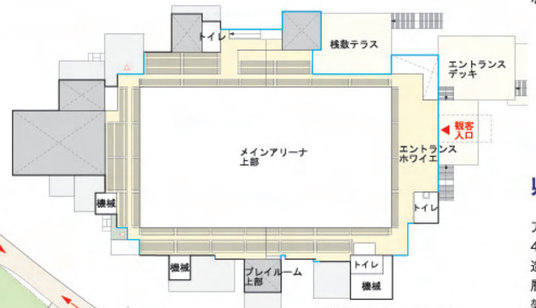


いろいろなパターン、動線を考えられる。

## フレキシブルなスポーツ施設

**動線計画**
１階南側は競技者用エントランス、北側は地域施設ロビーとして機能します。観客は２階からアクセスします。

**諸室計画**
多用途に使える部屋を各所に配置し、大会時と通常時、プロの試合時など、状況に応じた柔軟な運用を提案します。周遊道から、各室にアクセスし、それぞれ独立して使用できる開放的な施設です。



2階平面図 1/1000

1階平面図 1/1000

アプローチ
競技者、観客、地域施設使用者の大きく３つの人々のアプローチと動線を明快に分けます。

街の人の流れを活性化するような抜けの良い散歩道を整備します。それらの流れに絡むように、緩やかな丘や浅いくぼみの広場を計画し、人々が心地よく過ごせる空間をつくります。駐車場に併設する小さな広場は、臨時駐車場にも使われます。

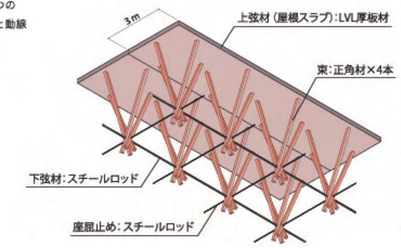
県産材や土を用いたフォリー、ストリートファニチャー、案内サインは、道にそって配置されます。巡り歩く散歩道の楽しさをつくりだします。

## 街とつながる散歩道と広場

配置図 1/4000

## 県産正角材が織りなす木造架構

アリーナの大屋根の木造架構は、広く流通する正角材４本を束材、スチールロッドを下弦材とした張弦梁構造です。屋根スラブである厚板の面材・LVL（単板積層材）パネルを上弦材として有効に効かせる合理的な架構としています。
１ユニット（3m x 48m）を製作可能な施工用の仮設ステージを屋根レベルで設け、そのステージ上で組み上げた架構を、順次横にスライドしていく工法を用いることで、高い精度での施工が可能となります。さらに、パーツのシステム化により、コストの低減も計ります。
また、製材で流通量の多い長さ 4m以下の一般的な正角材を多く使用し、地場産のスギを有効活用する計画です。屋根スラブの LVL パネルについても、地場産のスギを原料とし、加工したパネルとします。




**ユニバーサルデザイン～分け隔てのない計画**
バリアフリー意識を持ち、こどもから高齢者までが使いやすい計画をします。スロープの積極的な活用と識別しやすい形と色のサイン、休憩しながら歩ける空間の確保を考えます。

県産正角材を多用した屋根架構